

生き続ける都市と建築

第1回

フィレンツェの歴史的住宅

黒田泰介 | 関東学院大学建築・環境学部 教授



はじめに

永遠の都市ローマ、花の都フィレンツェなど、イタリアの歴史的都市を歩くと、街路に並ぶ古風な建物は建設当時の姿を保ちつつ、内部にはモダンな家具や設備が導入され、現代の生活の場として完璧に機能している姿を見かける。細心の注意を払ってレスタウロ（修復・再生の意）され、新旧の要素が破綻なく調和する歴史的建築は、新築の建物にはない大きな魅力をもつ。我が国でも、古びた建物をリノベーションして店舗やギャラリー等として積極的に利活用する例が増えている。こうした既存建造物に今日的な機能と役割を重ねることによって生まれる味わい深い空間は、地域や時代の違いを超えて、都市と建築の継続性を体現するものといえよう。

本稿は「生き続ける都市と建築」と題して、イタリアと日本の歴史的都市5つを取り上げ、その都市空間と歴史的建築に見られる重層性と継続性を多角的な視点から考察し、その可能性を考えていきたい。第1回はフィレンツェを舞台として、その特徴的な歴史的住宅を検証していこう。

カーサ・トッレ（塔状住宅）

中世イタリアの都市において、住宅は「パラッツォ」と「カーサ」の2種に大別される。パラッツォは貴族や大商人が建てた豪華な邸宅を指すのに対して、カーサは一般市民が住まう住宅である。まずはパラッツォ以前の貴族や有力一族の住まいであった、中世のカーサ・トッレ（塔状住宅）について述べていこう。

トッレ（塔）は本来、山野や海岸にあって、高所から敵の接近を発見し、のろしを上げて友軍に知らせるための軍事施設である。イタリア都市では、この塔が市内に持ち込まれ、貴族や有力一族が自身の権勢を誇示するために高さを競い、また政敵からの攻撃に対抗した。

13世紀のフィレンツェには、市壁内に150本あまりの塔が建っていたといわれる。

今日、市内に見る塔の外壁には、無数の四角い穴が開いている。これらの穴は角材を差し込んで、バツラトイオと呼ばれる木造の張出し通廊を設けるためのほぞ穴だ。バツラトイオは、平時には日当たりのよい作業スペースだが、有事の際には足下に迫る敵を攻撃するための最前線となり、また隣接する他の塔や建物を連結した。このような塔と一体になった小規模な住まいは、カーサ・トッレと呼ばれる。

フィレンツェ市内の設計事務所に勤務していた頃、筆者は「ポッカ・ディ・フォルノ」（かまどの口）と呼ばれたカーサ・トッレ内の一室に住んでいた【写真1】。この塔は13世紀に建てられたベツラ家のもので、1階店舗の入口には、愛称の由来となった扁平アーチが架かる。壁面にはかつてバツラトイオを設けたほぞ穴が残る。2階以上は住宅で、狭く急な階段を4階まで登ると、延床面積60㎡ほどの部屋にたどり着く【図1】。

古びた木製のドアを開けると、交差ヴォールトの低い天井が架かる居間がある。ヴォールトの中央には、かつてランプを吊した鉄のフックが残る。通りに面した窓を開けると、馬車を引く馬の蹄の音、オルサンミケーレ聖堂の鐘の音、雑踏の気配が部屋の中に流れ込んでく



写真1 ベツラ家の塔状住宅「ポッカ・ディ・フォルノ」

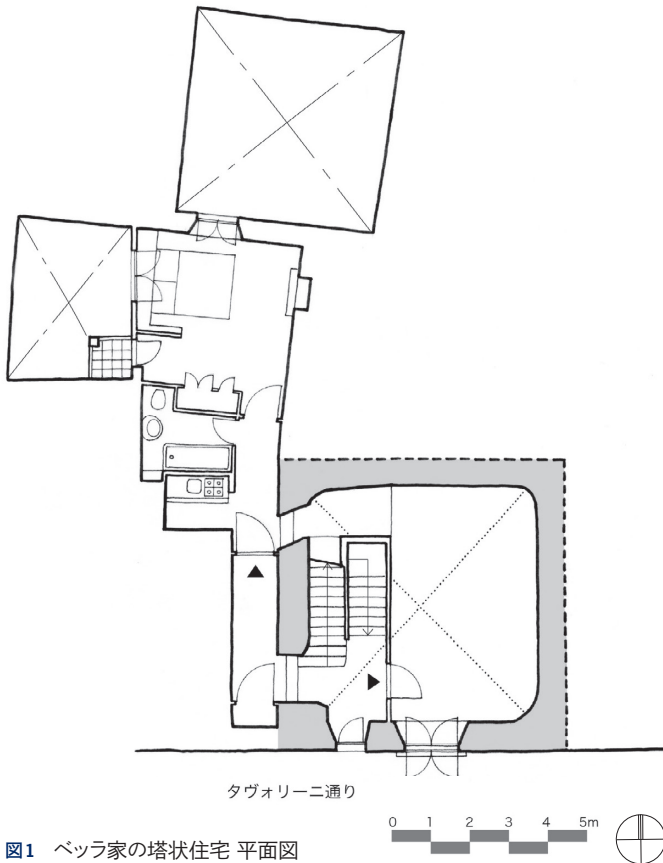


図1 ベッラ家の塔状住宅 平面図

る。窓から差し込む光は、ヴォールト表面の凹凸一つひとつを浮き出たせ、またレンガ張りの床に反射して白塗りの室内をピンク色に染め上げる [図2]。

塔は背後で16世紀頃の別の建物に接続する。塔の石積の壁面が顔を覗かせる両者のつなぎ目には階段2段分の高低差があり、後世の連結であることがうかがえる。この区画にはミニキッチンや浴室、寝室がある。古風な暖炉を備えた寝室は4m強の天井高をもち、松材の大梁が露出する室内は、塔とはまったく異なる雰囲気をもつ。時代が異なる2つの空間が融合したカーサ・トッレの姿は、正に重層性と継続性がつくりあげた住空間の一例だ。

スキエラ型住宅

カーサ・トッレが貴族や有力一族の建物であったのに対して、一般市民は「スキエラ型」と呼ばれる住宅に住んでいた。中世イタリア都市で最も普及した住宅類型であるスキエラ型住宅は、1階は店舗や工房、2階以上は倉庫や住宅に充てられ、間口4~6mの細長い短冊形の平面をもち、隣家と構造壁を共有する。京都の町屋にも似た構成をもつスキエラ型住宅だが、組積造の建物は上方へと増築を重ねていった [写真2]。

広い間口をもつ規模が大きい住宅は、街路に沿って部屋が線(リネア)状に並ぶという意味から「リネア型住宅」と呼ばれる。リネア型住宅には既存複数のスキエラ型が合体したものと、当初から複数

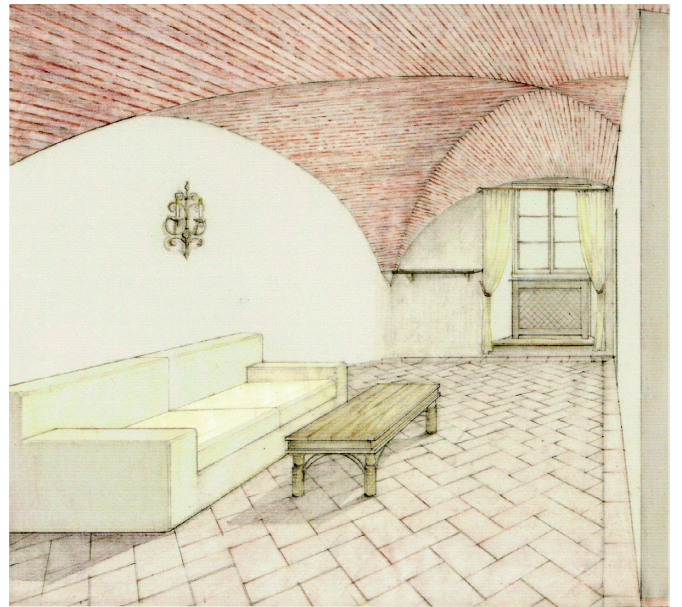


図2 ベッラ家の塔状住宅 居間

スパンの住宅として建設されたものとの2種類がある。

街の東側、サンタ・クローチェ地区の一角に、シナゴークと呼ばれるユダヤ教の礼拝堂が建つ。都心部にあるレプツリカ広場の北側にあったゲッター(ユダヤ人街)が再開発によって取り壊された代償として1882年に建設されたもので、イスラーム風の緑色のドームは市内でも目をひく。フィレンツェ大学での在外研究期間中、筆者は同地区内の住宅に住むことになった。この建物は12世紀に起源をもつスキエラ型住宅2件が合体した、リネア型住宅に分類される。統一された外観に対して、構造壁の配置や平面構成には、元になったスキエラ型住宅の痕跡が読み取れる。

チェントロ・ストーリコと呼ばれる歴史的な中心地区は、都市計画による規制が最も強い。凍結保存とも呼ばれるように、住宅を含む歴史的建築物については容積、形態、外観の変更が認められていない。窓や扉といった開口部の形や面積、壁面の色や材料、意匠についても細かな指導がある。建物内部ではオリジナルの空間構成を残すことが強く求められる。この小住宅も、こうした規制によって守られている建物の一つである。



写真2 スキエラ型住宅とリネア型住宅がつくる街区

地上4階、地下1階の建物は店舗が入らない専用住宅で、木製の大きな扉を開けるとエントランスホールがあり、鉄製の門扉背後にある共用階段が上階へと続く。当初は建物全体が一個人のものであったと思われるが、今日では集合住宅のごとく区分所有による複数のオーナーがいて、コンドミニオと呼ばれる組合を結成し、建物を管理している。管理費は専有面積、階(上階ほど高い)による従量制であり、保険や清掃、屋根や階段など共用部分の維持費は、専有面積による割合で各戸負担する。建物や設備に不具合が生じた際には、修繕方法や費用負担などについて、適宜話し合いの場を設けている。

筆者の部屋は1階に位置していた(図3)。この部屋はオーナーのザンポーニ夫人の亡夫が50年代に購入したもので、白を基調とした清潔感のある内装は、兄弟のインテリア・デザイナーが担当したと聞く。玄関を入ると小さな中庭が正面にあって、その横に浴室、個室、居間が続く。突き当たりには裏庭に面したダイニング・キッチンと寝室がある、延床面積100㎡強のアパートである。食卓の横を抜けると、30㎡程のテラスに出る。レンガ敷きのテラスに立てば、隣家の屋根の向こうに、シナゴグの緑のドームが顔を覗かせる。

1階の部屋は3方が壁に囲まれ、窓は中庭を除いて裏庭に向けた北側のみであったため、年間を通して快適な室内環境が保たれていた。筆者が滞在した夏は、外気温が39度を越えた記録的な酷暑だったにもかかわらず、室内気温は26度に留まってくれた。地中海性気候においては夏の暑さをしのぐため、湿度が多い日本のように

窓を開けて風を入れるのではなく、鑑戸を閉め切って強烈な直射日光の入射を防ぐのが基本である。なお当地では住宅へのクーラー普及率は低い。対して暖房は、各室に温水ラジエータが1基ずつだったが、厚い壁体は蓄熱性能が高く、冬場を通して常時運転することで室内温度は安定していた。築900年にもなる歴史的住宅は、環境にやさしい建築だった。

パラッツォ

中世の時代、貴族や有力一族は高くそびえる塔を中心に血縁関係でまとまり、抗争に備えて要塞のようなカーサ・トルレに住んでいた。13世紀末からの繁栄の時代、市内の政治状況も安定し、上流階級の住まいは美しさと居住性を重視した建築へと変化していく。ルネサンス期に高度に洗練されたフィレンツェ風のパラッツォは邸宅建築の規範となり、イタリア中に、さらにはヨーロッパ各地へと広まっていった。

パラッツォは、英語のパレスや仏語のパレと同じく、パラティノの丘に建つ古代ローマ皇帝の宮殿を示すラテン語、パラティウムを語源とする。今日、市内の代表的なパラッツォは美術館や役所などへの公共利用が多いが、今なお貴族の子孫が住まうパラッツォも数多く残っていて、区分所有の集合住宅と化したものもあれば、地の利と規模、格式を活かしてホテルや企業・銀行等のオフィスに改装されたものもある。近年ではレジデンツァ(中・短期滞在者向けの家具、調度付きアパート)やB&B(ベッド&ブレイクファースト、簡易民宿)として人気を博するパラッツォも増えている。

サンタ・クローチェ広場から北に抜けるペビ通りには、通りの名の由来となった名門ペビ家の邸宅が建つ。黄橙色のスタッコに覆われた外壁に、ピエトラ・セレーナ(トスカナ産の灰色の砂岩)の切石積みアーチの窓が並ぶ建物は15世紀初めに建設されたもので、プッチ家、ストロツツィ家といったフィレンツェを代表する名家の後に1653年、ペビ家がこのパラッツォを購入し、現在に至る。

ペビ家の紋章が掲げられた入口をくぐると、通路の奥には大きなアカシアの木が生えた四角い中庭がある。中庭に一歩足を踏み入ると、壁面いっぱいに描かれた美しいグラフィート(掻き絵)に目を奪われる。グラフィートとは上層の白色スタッコをナイフや鉄筆で掻き取って下層の濃色を露出させる技法で、シャープな線の描写に優れる。ルネサンス後期、パラッツォの壁面はグラフィートによるモノトーンの文様や色鮮やかな所有者の紋章で華やかに彩られた。

パラッツォには代々、ペビ家一族が住み続けている。同家はキプロス島の出身で、その名はかつてフィレンツェに胡椒(ペペ)を輸入していたことに由来するという。1階は店舗や事務所として賃貸し、2階はミラノに住む親戚が所有する。3階に住むペビ家は、屋敷の一角でB&Bとレジデンツァを営んでいる。

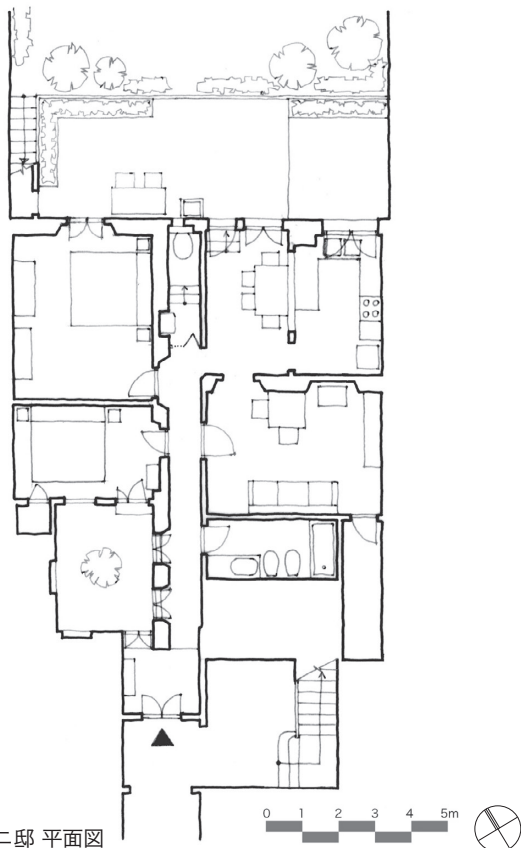


図3 ザンポーニ邸 平面図

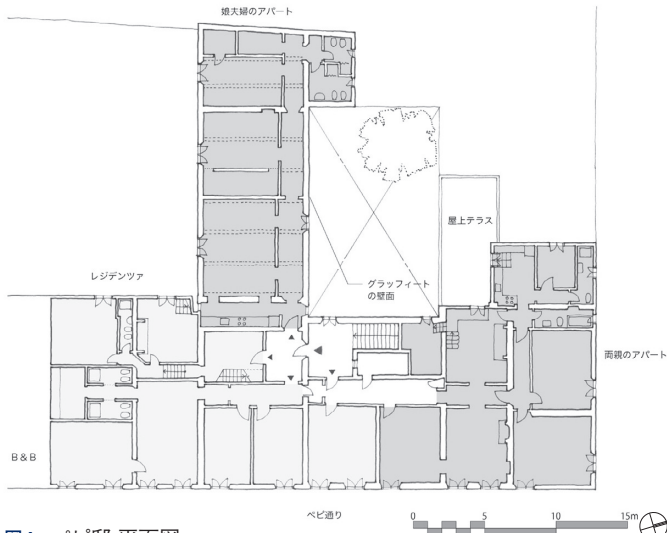


図4 ペピ邸 平面図



写真3 ペピ邸 屋上テラスのながめ

白壁に品良く馴染むピエトラ・セレーナの階段を最上階まで登り切ると、ペピ家の住まいとB&Bへの入口がある。フロアは3区画に分かれていて、最も面積を占める親世帯の一角がB&Bに改装されている【図4】。客用のエリアは朝食が出される共用のサロン、寝室が4室、共用の浴室2つからなる。ペピ家の紋章が刻まれた扉の向こうには、夫妻のプライベートな住まいが広がる。大きな暖炉があるサロンには、重厚な古家具が並ぶ。どっしりとした木製の机では、ご主人がパイプをくゆらせながら新聞を読んでいる。植木鉢の緑に囲まれた、広々とした屋上テラスに出れば、手すり越しに中庭の美しいグラフィートが見える【写真3】。「ここで過ごす夏の夜のひとときは、本当にすばらしいのよ」と婦人がおっしゃっていたのもうなずける。

老夫婦の住まいとは対照的に、娘夫婦が住む区画はオフホワイトを基調としたモダンなインテリアだ。フローリングは幅広のバイン材、照明は間接照明を使ったロフト調でまとめられている。

残る一区画は、独立したレジデンツァとなっている。キッチンには食器やリネンも完備され、中・長期滞在も可能な環境が整っている。扉を開けると高い天井をもつサロンがあり、上階には高い勾配天井と暖炉をもつ寝室がある。明るいモダンなキッチン脇にある小階段を登ると、ペピ家の屋上テラスを見下ろす小さなテラスに出る。オレンジ色の瓦屋根の向こうには、サンタ・クローチェ聖堂と大聖堂の

クーポラが並ぶ見事なパノラマが広がっていた。

こうした歴史的建造物を個人で維持・管理し、住み続けていくのは、経済的にも並大抵の苦勞ではない。行政の後押しもあって、イタリア各地でパラッツォ・ペピのような、オーナー自身が経営する小規模なB&Bが生まれた。オーナーにとっては、愛着ある建物を人手に渡すことなく、自身で住まいながら収入を得て建物維持費をまかなうための一手段であり、客からすれば由緒ある素晴らしいパラッツォにフレンドリーに滞在し、素敵なおとときを過ごすことができる、またとない機会でもある。近年では外国の大規模資本が入り、パラッツォ一棟全体がレジデンツァに改装される例も増えてきた。旧来の所有者が自身のパラッツォを手放さずに管理・運営していくための一手法として、こうしたB&Bはぜひ応援していきたい。

くろだ・たいすけ

1967年東京都生まれ。1995～98年M.カルマツン建築設計事務所。2000年東京芸術大学大学院修了。博士(美術)。関東学院大学建築・環境学部教授。専門は建築再生計画(レストアウロ)。著書に『LUCCA 1838』(Maria Pacini Fazzi Editore、2008年)、『イタリア・ルネサンス都市逍遙』(鹿島出版会、2011年)、共著に『リノベーションからみる西洋建築史』(彰国社、2020年)など

自習型認定研修の設問

設問 1

中世イタリア都市の住宅類型のうち、一般市民の住まいは次のどれか。

- a.カーサ・トツレ
- b.パラッツォ
- c.スキエラ型住宅

設問 2

パラッツォの利活用方法として普及しているのは次のどれか。

- a.美術館
- b.病院
- c.学校



認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ <https://jaeic-cpd.jp/> にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。
※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみが表示項目になります。